

中学生が通年、 地元漁業をフルコース体験・調べ学習

カキ養殖の盛んな三重県鳥羽市浦村地区。地域のカキ養殖業者は、「カキ屋さん」と親しみを込めて呼ばれている。鏡浦中学校は20～30名の小規模校で、生徒による「カキ屋さん」でのカキ養殖体験を平成11年度から開始した。それから、カキの料理や販売体験、船上釣り漁・魚さばき・干物づくり・ひじき干しなどの体験を加えて、ふるさとの海の体験学習を充実。同時に「総合的な学習の時間」で、地域漁業の調査学習を続けている。

■10年以上受け継がれる！カキ養殖体験

平成22年度の年間スケジュールは以下のとおり。

4月 ひじき口(ひじき干し)体験

5月 魚さばき、調理、アマモの苗植え

6月 アマモの種子採取

6～10月 海女漁・釣り漁等の漁獲漁業の調査活動

10月 カキ養殖作業体験(種ざし作業、選別作業)

2月 カキ養殖作業体験(収穫)・調理体験、カキの国まつり販売体験

生徒の祖母のほとんどが海女として活躍しているほどの漁業の町だが、今の子どもたちの生活は地域のその営みから離れてきている。しかし、上記のような年間にわたる体験・調査学習を通じて、自分たちが暮らす地域はどんなところか、地域で盛んな漁業と自分たちとはどうつながっているのか気づいていく。漁家と一緒に作業をして言葉を交わし合うことは、漁業の町の人びとの思いを知る貴重な機会。一連の作業を体験し、家でも魚を捌くようになり、食べ残しもなくなってきた。



■漁場を取り巻く環境をしっかりと学び、発信

地元の「海の博物館」との連携も大きな役割を果たしている。年々、学芸員や地域の人たちの協力で、昔の漁業と漁具・漁法、カキ養殖の歴史、「浦村カキ」の特徴、生産と流通などについて調べてきた。海水の透明度調査や伊勢湾流の観察、水源山林の踏査と腐葉土の透水実験なども実施し、魚介類の育つ海の環境について学んできた。そうした成果をもとに、海の博物館と共同で行なった特別展「カキを育てる海—私たちの海のこと みんなで調べました」は、漁業者などから大いに喜ばれ、小学生も見学にきた。

中学校で、海の学習がしっかりと受け継がれ、成果が発信される。「山がたくさん残っているから、山がたくさん栄養を海に流してくれるから、カキの養殖がさかんな町になっている」。こんなとらえ方が生徒たちから生まれている。

漁場を養う海草アマモの栽培体験が、平成22年度から始まった。この体験を通して、実際の漁場がとても破壊されていることに気づき、アマモが再生できる環境に回復することの大切さが実感できた。活動に関わった漁家や学校の先生にとっても見直しの契機となり、生徒たちを中心に、みんなで漁業の町の課題を考える、そんな教育ファームになっている。